

# 対話重視の日本語ライティング支援に関する成果報告

梅村 修・東田 充司・高垣 伸博・真銅 正宏・豊島 眞介  
泊 吉実・村上 亨・齊藤 一誠・佐藤 伸行

Research on university writing center feedback for student centered interactions

Osamu UMEMURA, Atsushi HIGASHIDA, Nobuhiro TAKAGAKI,  
Masahiro SHINDO, Shinsuke TOYOSHIMA, Yoshimi TOMARI,  
Toru MURAKAMI, Kazunobu SAITO, Nobuyuki SATO

# 対話重視の日本語ライティング支援に関する成果報告

梅村 修・東田 充司・高垣 伸博・真銅 正宏・豊島 眞介  
泊 吉実・村上 亨・齊藤 一誠・佐藤 伸行 (執筆順)  
(追手門学院大学)

Research on university writing center feedback for student centered interactions

Osamu UMEMURA, Atsushi HIGASHIDA, Nobuhiro TAKAGAKI,  
Masahiro SHINDO, Shinsuke TOYOSHIMA, Yoshimi TOMARI,  
Toru MURAKAMI, Kazunobu SAITO, Nobuyuki SATO  
(Otemon Gakuin University)

【キーワード】 ライティングセンター 個別ライティング支援 定例セミナー 学生チューター  
対話

## 第一部 ライティングセンターの現況と課題

### 1. はじめに

追手門学院大学のライティングセンターは、2017年4月に発足した学習支援の組織である。ライティングセンターの設立の趣旨は、Writing Across the Curriculum (注1) の理念に基づき、初年次科目から卒業論文まで、4年間を通じて、学生の日本語のライティング能力を向上させること、そして、学生一人ひとりが、表現する喜び、理解と共感を得る喜び、人や組織に変化をもたらし自身も成長する喜びを感じてもらうことである。

2019年2月25日現在、所員は専任教員12名、兼担事務職員3名、学生チューター24名体制である。ライティングセンターの主な活動は、

- (1) 日本語の個別ライティング支援 (チュータリング)
- (2) 文章力底上げのための所員によるセミナー (定例セミナー)
- (3) 学生チューターの研修
- (4) 書くことに関する啓発活動

以上4つである。

---

1) Writing Across the Curriculum……個々の学生の興味や専門に応じて、細かな指導が進められ、カリキュラム全体が、書く力の養成で貫かれていること。

## 2. 2018年度 活動概況

発足から2年、ライティングセンターは、上記の4つの活動を通して、教職員、学生から少しずつ認知され、利用されるようになってきた。以下に、2018年度の主な活動の概略を記す。

### セミナーの開催

2018年度は「文章表現のコツ」という統一テーマのもと、「ライティングセンター 定例セミナー」を計18回（春9回，秋9回）開催した。参加者はのべ983名（春155名，秋828名）だった。セミナーの様子は、図書館・情報メディア課や広報室の手で動画撮影され、編集を経たうえで、HP上に掲出し、広く世間の視聴に供した。また動画は「日本語表現」等の授業で教材としても活用されている。

### 学生チューターの育成

懸案だった学生チューターも育ってきている。2017年度、豊島真介所員と筆者（梅村）で、1クール4回の研修を、計4クール行い、2018年4月19日には、川原学長の臨席のもと、学生チューター研修の修了生（第1期生～第4期生）9名に認定証が授与された。今年度春学期に4回の研修を終えた第5期生6名（ピアサポーターが中心）に対しても、6月31日、同じく認定証が授与された。また、6月12日と15日の両日、「学生チューター募集説明会」を開催し、延べ21名の参加者を集め、そのうち12名の学生が、学生チューターを希望している。2018年8月28日現在、希望者12名のうち、5名が研修を受けている。

### 川端康成青春文学賞への協力

書くことに関する啓発活動も活発だ。2018年春学期には、茨木市政70周年を記念して設立された「川端康成青春文学賞」の第一次審査を、ライティングセンターが分担することになり、東田充司所員と学生チューター8名が、応募総数1341篇のうち429篇の作品の審査に当たった。また、4月25日には、「小説を書くことで世界の見え方が変わる－際立つ文章を書くために－」と題して、真銅正宏所員による特別セミナーも開催された。学院関係者からの作品応募は31件にのぼった。

## 3. 課 題

一方で、2018年度の春学期は、ライティングセンターの課題が大きく浮かび上がった半年間でもあった。以下、3つに分けて詳述する。

### 個別ライティング支援（チュータリング）の件数が増えない

第一に、個別ライティング支援（チュータリング）を受けに来る学生の数がなかなか増えなかった。

2018年度は、年間目標件数を300件に設定した。ところが、2019年1月18日現在の相談件数は238

件にとどまっている。とりわけ深刻なのは、1回生の利用が少ないことである。チュータリングを受けに足を運ぶのは、上回生、なかでも比較的ライティング能力の高い学生たちである。ライティングセンターの“正客”である「分厚い中間層」～書くことに意義を見出せない、もしくは、書けないことの危機感が希薄な初年次生～は、なかなかライティングセンターに足を向けてくれない。

われわれもけっして手をこまねいていたわけではない。なんとかチュータリングの稼働率を上げようと、新入生演習の学内見学ツアーにライティングセンターを組み入れてもらった。予約サイトの入り口をユニバーサルパスポートのトップページに移行し、ワンクリックでライティングセンターにつながるようにした。全学教授会で授業との連携もお願いしたこともある。

しかし、成果はなかなか現れない。筆者の周辺の学生によると、チュータリング支援の時間帯（2時間目と3時間目）は、たいてい授業で埋まっており、ライティングセンターに相談に行きたくても思うに任せない、という事情があるらしい。

そこで、秋学期から、チュータリングの時間帯を従来の2・3時間目に加えて、4・5時間目にも拡げることになった。さらに、図書館の大閲覧室の一角に「ライティング・サポート・デスク（仮称）」を開設し、ライティングセンターのPRに努めるとともに、利用の便宜も図ることになった（注2）。

秋学期からは、基盤教育科目・日本語表現との連携が始まり、個別ライティング支援の件数は、飛躍的に伸長した。

### 学生チューターのOJTの機会が少ない

第二の課題は、上のように、個別ライティング支援が低調なために、せっかく研修を受けてチューターになった学部上回生に、十分なOn the Job Trainingの機会を与えてやれないことだ。

先に書いたように、学生チューターは続々と育ってきている。研修待ちの学生も多い。しかし、たった4回の研修で、すぐにチュータリングの現場に立てる学生は皆無である。もとより、上回生とはいえ、一般学生にくらべて格段に秀でた文才を持ち合わせているわけではないし、たとえ文才があっても、文章指導と文才とは必ずしもイコールではない。文才に磨きをかけると同時に、ライティング支援の経験値を積み上げていかなければ、到底、行き届いたチュータリングはできない。

そこで、4回の研修を終えた学生には、さらなる研修～On the Job Training～を課すことにした。すなわち所員の先生のライティング支援を参与観察することを必修にしたのだ。いわば、教育実習である。学生チューターは半年から1年、OJTを体験し、チュータリングのノウハウやマインドを体験的に学んで、やっと独り立ちする。独り立ちした学生を「学生チューター シニア（senior）」、教育実習中の学生チューターを「学生チューター トレーニー（trainee）」と呼び習わすことにした。

ところが、この仕組みがうまく回らない。学生チューターは上回生とはいえ、時間割の余裕はわ

---

2) 図書館の大閲覧室の「ライティング・サポート・デスク（仮称）」……6月18日7時58分、大阪府北部を震源として発生したマグネチュード6.1の大地震により、追手門学院大学の図書館は大きな被害を受けた。大閲覧室でのサポートデスク構想ははまだ棚上げされたままである。

ずかだし、そもそもライティング支援を受けに来る一般学生が多くない。だから、学生チュータートレーニーはOJTの機会に恵まれず、シニアになる前に心が離れていってしまう。せっかく応募説明会までして集めた学生チューターだが、腕の振るいどころが確保されていないのだ。

### 個別ライティング支援の「質の保証」ができていない

第三の課題は、所員の指導力の問題である。

ライティングセンターには、2019年2月1日現在12人の所員がいる。いずれも劣らぬ文章家揃いで、新聞社や通信社の辣腕記者あり、近現代文学の研究者あり、日本語教育の専門家あり、小学校の元国語教諭あり、これほどの陣容を備えたライティングセンターは、全国を見渡してもちょっと珍しいのではないだろうか。

ところが、所員同士で日ごろのライティング支援について語り合う機会はほとんどない。ひとつには10人が10人も学内の役職をいくつも兼ねておりたいへん忙しい。ふたつに、ライティング支援は学生からの依頼に応じて“飛び込み”で入る個別対応であり、ピア・レビューしようにもやりようがない。みつつに、所員同士、遠慮やプライドがあって、お互いのライティング支援に口を挟みにくい、という面もある。

以上のような理由から、発足から1年半以上をすぎた今日まで、われわれライティングセンターの所員は、お互いどのようなチュータリングをしているのか、ほとんど知らないのである。

もっとも、発足以来の基本原則は共有している。いわく、「相談学生の文章を添削することが目的ではない。良い書き手を育てること、自立した書き手を育てることが目的である。われわれは赤ペン先生にはならない」「人間的なふれあい、対話を通して、相談学生に自らの躓きに気づかせる。修正はあくまで書き手にしてもらおう」。このような基本原則に異論をさしはさむ所員は、おそらくいない。一人ひとりが熟練の日本語の使い手だから、日本語の語感に大きなズレもないだろうし、統語の不整合には等しく違和を感じると思われる。

しかし、「良い書き手」とは何か、「自律した書き手」とはどんな書き手か、イメージや定義は統一されていない。また、学生自身に自らの文章の問題点に気づかせるにはどのような働きかけが適当なのか、意見が分かれるだろう。

もちろん12人の所員が「理想の書き手」のヴィジョンを統一する必要はないし、まったく同じ指導法で学生に当たる必要もない。画一的な指導マニュアルのようなものを編む必要も、今のところ感じない。ただ、ライティングセンターの所員がお互いにどんなライティング支援をしているのか、情報を共有し、良い点は学びあい、悪いところは改めて、切磋琢磨しながら、最低限の「質の保証」をはかることは大事なことだと考える。

## 4. 本稿のねらい

以上、春学期の活動を通じて浮き彫りになったライティングセンターの課題を3つに分けて説明したが、本稿では2つのタイプの論考を集めて、第二部と第三部を構成している。

第二部は、個別ライティング支援の「質の保証」に焦点を当てた論考である。

日ごろ、所員は、一人ひとり、どのような個別ライティング支援を展開しているのだろうか。どんな実践に手ごたえを感じており、逆に、どんな実践に物足りなさを感じているのだろうか。相談学生に自らの躓きを気づかせる効果的な声かけがあったらぜひ共有したい。逆に学生の意欲を萎えさせた失敗談があれば聞いてみたいものだ。ぜひ今後のチュータリングに生かしていきたい。5名の所員が春学期の個別ライティング支援の実際について報告している。

第三部は、定例セミナーの報告である。

先に述べたように、2018年度は「文章表現のコツ」という統一テーマで定例セミナーを計18回開催した。セミナーの様子は、HP上に掲出し、授業でも教材としても活用されている。

しかし、それだけではもったいない。将来的には、ライティングのための補助教材として再編集したり、「ライティング講座ブックレット」としてジャンルごとに冊子化して配布したり、ライティングの要諦を簡潔にまとめた持ち帰り用ティップスに書き直したり、いろいろな二次使用が可能であろう。そのために本稿で定例セミナーの内容をテキスト化しておくのは無駄ではない。第三部では5名の所員が自身の定例セミナーの内容を書き起こしている。

(梅村 修)

## 第二部 個別ライティング支援の実際

### 1. 梅村 修 所員の場合

#### 外国人留学生対象のライティング支援

筆者(梅村)は長らく、大学で学ぶ外国人留学生対象の日本社会適応教育、平たく言えば、日本語や日本の文化を教える仕事に従事してきた。留学生にとって大学で勉学や研究を進めていく上で、日本語の語彙や文法の知識を深め、4技能の運用力を高めることはたいへん重要なことである。中でも、統語面で破綻なく、的確な語彙や表現で、論理的な文章をつづれる能力の習得は欠かせない。

そこで、留学生対象の日本語のライティング支援は、徹底的な添削指導が中心になる。すなわち、日本語教師は、留学生の作文を前に、ひらがなカタカナや漢字の表記の間違いに始まって、文体の不統一、格助詞や自動詞・他動詞の間違い、用言の活用の混乱、モダリティやヴォイスやアスペクトやテンスの不適切使用、段落構成の間違いに至るまで、鵜の目鷹の目でチェックしていく。当然、赤ペンは必携アイテムである。原稿用紙は真っ赤になる。

つまり、外国人留学生を相手にしたライティング支援では、何よりも日本語の「正解」を「教えこむ」ことが重視される。いきおい、ライティング支援は規範的、教条的にならざるをえない。また、留学生も明快な言語知識の「正解」や運用上の「ルール」を日本語教師に求めてくる。

#### 日本人学生対象のライティング支援

ところが、日本語を母語とする日本人学生相手のライティング支援はまったく様相が異なる。筆

者にとって、これは大きな驚きであった。

ライティングセンターでは、筆者は自分を教師 (teacher) だとは思ったことはない。ファシリテータ (facilitator) だと位置づけている。

チュートリアルは、書き手とチューターの2人が「対話」の中で作り上げていくものだから、チューターは、書き手の思いを尊重し、改善点は書き手自身に気づかせるように示唆を与える。決して「正解」を「教える」ことはない。修正はあくまで書き手にしてもらい、筆者はファシリテーションに徹する。

相談学生が自分で「正解」を導き出したら、祝福してやる。

考えあぐねていたなら、問いかけてやる。

自分の躓きに気がついたなら、ほめてやる。

やる気を失いかけたら、励ましてやる。

### 理想と現実の狭間で

と、ここまで書いたことはすべて筆者の「願い」に過ぎない。チューターたる者、こうありたいものだという「理想」をつづつたに過ぎない。

筆者自身、「チューターは相談学生にとって自分の文章を見直す鏡のような存在でなければならない」と、人にもいい、自分にも言い聞かせながら、実は長年染み付いた教師 (teacher) の土性骨が随所に顔を出して、どうしても「教えて」しまう。赤ペンを振るって「正解」を与えてしまう。ファシリテータ (Facilitator) になりきれない。これでは相談に来た学生は自律した書き手に育たないと、頭ではわかっているが、“教師の身体”からなかなか脱却できない。これが筆者の今の悩みである。

### 個別ライティング支援の実際～声がけを例に

それでは、実際に筆者がどのようなチュータリングをしているか、ライティング支援の最中に、筆者が頻繁に口にする声がけのストックフレーズを紹介して、どんな思いでこうした常套句や決まり文句を乱発しているかを説明していきたい。

#### 「それでは、声に出して読んでみてください」

……ライティング支援では、相談学生自身に、自らの課題とその修正方法に気づいてもらわなければならない。そのためには、姿見に等身大の自分を映すように、自分の文章と向き合ってもらわなければならない。

#### 「今度は、私が読んでみましょう」

……相談学生は他人に自分の文章が音読された経験をほとんどもたない。他人の口を借りて立ち現れる自分の文章の姿に初めて対面する。多くの相談学生は、「自分で音読する以上に恥ずかしかった」という感想を述べる。

「とても～な文章ですね」

……どんな文章にも必ず長所はある。だから、発見してほめるように心がけている。内容面で取り立てて見どころがなかったら「文字がきれいですね」でもいい。「7つほめて、3つけなす」ようにしている。

「この～は間違っていますね。ここの～は修正してください」

……単純な誤字や脱字、漢字や「てにをは」の間違いは、この時点で指摘する。「赤ペン先生にならない」という大原則を踏み外すようだが、ワープロソフトが見つかる程度の語彙や統語の間違いはその場で指摘してやりたい。これぐらいのサービスはかまわないし、むしろすべきだと思う。

「音読してみ、つかえるようなら、どこか問題点があるのかもしれない」

……音読して、口ごもったり、囁んだりする場合、そこに表現の間違いが潜んでいたり、一文が長すぎて、主述の不对応を来たしている場合が多い。目ざとく指摘して、相談学生自身に訂正させる。

「ちょっと一つの文が長すぎますね。『、』や『。』を使って短く切ってみたらどうでしょう」

……書きっぱなしで、推敲の跡が認められない文章には、1つの文に、たくさんの情報を詰め込みすぎている傾向がある。その結果、一つの文が冗漫、長大になり、書き手の呼吸や息づかいが伝わってこない。長い一文は、主語の宙ぶらりんや、主述のねじれの原因でもある。そんな文章の書き手には、読点（、）や句点（。）を意味のかたまり、意味の切れ目を使って、文を短く言い切り、書き募るように指導する。

「改行するならどこでしょうね。どんな接続表現を先立てたらいいでしょうね」

……大学生のみならず、日本人の書く文章は、総じて欧文でいうところのパラグラフ・ライティング（1つの段落に1つの中心文）ができていない。学生には、パラグラフ・ライティングができなくとも、せめて、段落構成を絶えず意識する習慣をつけさせたい。そのための方便に、接続表現（ディスコースマーカー 後述）を段落の冒頭に置くように指導する。

「ここはちょっと書き足りないですね。5W1Hに気を付けて、もっと具体的に書いてみましょう」

……たくさんの情報を詰め込みすぎて、消化不良を起こしている文章も困ったものだが、逆に、情報量が少なすぎたり、抽象度が高すぎたりする文章も読みづらい。そもそも書くということは、1つの考えを詳しく説明したり、言い換えたり、補足したり、根拠を挙げたり、具体例を挙げたり、別の角度から説明し直したりすることに他ならない。その手間を惜しんではならないことをわかってもらう。

「この文章は、誰に向けて書いていますか」

……相談学生が持参する文章は、レポートや論文の下書きが多い。したがって、読み手は教員である。学生には常に教員のreadability（読みやすさ）に配慮をするように言う。文字の丁寧

さはもちろんだが、一文を簡潔にして的確な接続表現でつないでいくこと、意味の固まりで段落を構成して的確に改行すること、中でも事実と意見をきちんと分けることなどを指導する。

「テーマに沿っていますか。なんだか論点がずれていませんか」

……問われていることにきちんと答えているか、考えさせる。レポートの場合、テーマはあらかじめ指定されている場合がほとんどだが、まれに自由論題のようにテーマ指定がない場合もある。また、テーマが指定されていても、あまりに概略的・包括的で、テーマを絞り込まないとにつきもさっさもいかなない場合がある。そういう場合は、問題提起から考えさせる。自ら発問して自ら答えを導き出すのが、将来の研究につながる大学で勉強である、と説諭する機会でもある。

「同じ表現が何度も出てきますね。ほかの表現で言い換えたらどうなるでしょうね」

……一語でも短く、一字でも短く、削れる言葉は徹底して削る。また、同じ内容が繰り返し現れる文章は冗漫なので、できるだけ別の表現を考えさせる。

以上のようなストックフレーズを用意して、時と場合に応じて、あたかもトランプのカードをきるように、次から次に相談学生に繰り出していく。大事なことは性急に“正解”を与えないことだ。相談学生が自ら考えて答えを出すまで、根気強く待つことがとても大事である。

(梅村 修)

## 2. 東田 充司 所員の場合

### 指導にあたって

ライティングセンターでは、「レポートの書き方がわからない」、「何を書けばいいかが途中からわからなくなった」、「完成したけど自信がない」など、書く前から完成後までどの段階でも相談を受ける。文章作成にあたっての何等かの課題意識を持っているが故に入室するものの、それが具体的に何なのかがよく分からず、何を相談していいのかを明確に説明することが出来ない場合が多い。書くことの広範な指導範疇を勘案すると、尤もなことであろう。

そこで、チュータリングに当たっては、丁寧な対話を重ねることによって、相談者が困っている段階やその分野、そこから生じる課題を見つけ出すことから始める。レポート課題を一例に挙げれば、「課題に即したテーマが決まらない」、「書き始めようと思うが、何をどう書いていいかわからない」、「とりあえず最後まで書いたが、これが体裁を為しているかどうか不安である」など、相談学生が必要とする助言は、当然のことながらそれぞれに違っている。どのように修正するとよりよい文章になるのかを助言できるためには、相談学生の書き手としての自立を目指す上での「信頼関係の樹立」が求められる。

ここでは、2018年度より本学に着任すると同時にライティングセンター所員としてチュータリン

グを行ってきた実際を報告することで、一人でも多くの書き手の自立を促す一助としたい。ここに内外を問わず大方の御批正をお願いするものである。

### 志望理由書での相談

来室学生の相談分野（文書の種類）の中では、「志望理由書」は最も目的意識が高く、必ず自分なりの完成文書を用意している。関係するハウツーものを含めた書籍等を熟読し、何等かの対面相談（就職・キャリア支援課や、ゼミ担当教員が多かった）を済ませている場合が多いものの、ここまでの来室歴には差があった。相談に来る4年生にとっての就職試験対策は最も重要な課題であり、丁寧に会話を重ねることによることによる信頼関係の樹立が重要であり、相談時間（40分）の半分以上をこの質問に費やした。

相談の後半では、面接時に求められる記載内容の詳細をあらかじめ想定して、志望理由書の項目決定をすることを助言した。本人なりの努力の成果である志望理由書は、概ね完成度は高く汎用性には優れているものの、作成者ならではの独自性という視点からは弱いものもあった。作成文書の完成度を論じる上で、その文書を読む相手をいかに意識したものであるかが最も大切な観点のひとつである。言うまでもなく、志望理由書は審査のために求められるものであり、その後の面接資料として活用されるものである。20分程の対話から浮かび上がった、企業側に強調できるであろう“強み”を再確認することと、そこをどのように志望理由書に盛り込んでいくかは、あくまで相談者が自立して構築するものである。そんな助言に声を上げて賛同してくれる場面が多かった。ライティングセンターの果たすべき役割のひとつであろう。

また学生チューターの同席が、最も効果的であった事例でもあった。学生チューターだからこそ成し得た助言は、同じ4年生という立場での努力に対して行った、心からの称賛であった。ここで得られた称賛が持つ意味は大きく、その後の結果の如何に関わらず、学生チューターも含めて成果報告が寄せられたことでも明らかであった。

### レポートでの相談（全く書けていない場合）

ライティングセンターでの相談はWeb予約による。予約の時点で相談したい文書をあらかじめ添付しておくことができる。そもそもレポートで何を書けばいいか分からない、あるいは、どう書いていいか分からない場合は、この事前提出は物理的に不可能である。私が事前に予想した相談者像は、どちらかと言えば意欲に乏しい姿であった。しかし実際に担当したケースでは、書きたい意識が高くテーマも複数考えている、テーマは決まっているが構成が分からず書き始められないといった、意欲溢れる相談者が大半を占めていた。

客観的事実に基づいて論理的思考を駆使して書く文章は、ある意味で自分を表現するためのツールと言うことが出来る。客観的な材料を揃え、それらを順序立てて読み手に説明することが重要であるわけで、レポートを課している対象者を意識しての丁寧な質問を大切に。「良かった、今までこういったレポートを書いたことが無かったので、あらかじめ書く前に相談することができ

ました。」「ということは、最初に私が考えたテーマは、理にかなったものなのですね。」「ちょっと待ってください、仮にこの流れで書き進めるならば、結論は最初に示してもおかしくないですか。」こんなある意味で理想的なチュータリングに、有意義なやり取りを通じて、こちら側が学ぶことが多かった。

さらに、ここでも学生チューターが存在がとても大きかった。同世代のチューターは、自分ならどうするかを考えながら、テーマについての意見を持つ。相談者のテーマ決定に適切な助言ができる背景がここにある。話し合いの中で自分にはない考え方に学生チューターが触れることによる学びがある。視野の広がり、学び合い・教え合いの確かな姿が見られる。この点から、意欲的な書き手の育成に於けるライティングセンターの役割は大きい。

### レポートでの相談（あらかじめ書いている場合）

相談者によって、大きくその完成度に差があった。まずは良くかけている場合から報告する。本学の予約システムでは、あらかじめ相談したい文書を添付して届けておくことが出来る。ある相談者の場合は、かなり早い時点から、添付文書が届いていた。本人なりに自信満々で、添削指導が目的ではないことを分かった上で、「どうか赤ペンを入れてください」との希望があった。何度もライティングセンターを利用しているようで、学生チューター志望も視野の中に入っているらしい。本人なりのテーマ設定も出来ており、助言の余地が無いわけではないが、私への質問が矢継ぎ早に寄せられた。ライティングセンターの方針に同意してもらった後に、念のために作成しておいた「赤ペン入り文書」に食い入るように見入った後、少々の軌道修正を自らの言葉で表明すべく、会話が進んだ。あくまでも例外的な対応ではあるが、チュータリングの意義を感じたのも事実である。

また、親友である2人が同時に来室し、同一のレポート課題について一緒に指導を受けたいとの申し出もあった。予約の段階からどうしても同時入力ができない（そもそも個別対応が前提であり、不可能なのだが）ことから、片方の名前でもとりあえず予約したとのこと。はっきりと比較しながらの指導を求めるものであった。たまたま相互に学び合える違いが随所にあり、学生チューターの意見とも相まって、素晴らしい充実した学びが実現した。いずれも、誰に対して何を書こうとしているかが明確であり、事例の挙げ方や構成は最初の段階から十分な検討がなされていることがよく分かった。最後にはお互いがそれぞれの良さを言い合える場面もあった。

しかしながら、自分から「これでは何が言いたいのかが分かりませんね…」と意気消沈してしまう相談者もあった。あくまでライティング支援が目的であり、考えさせるのが筋ではあるものの、相談者の到達度からは『まず教える』ことから始めなければならないケースがあった。筆者（東田）は長らく小学校で国語教育にあたってきた。入門期の文章作成指導には、取材・選材指導と、表現・技術指導の2つがある。後者の力は、小学校段階から少しずつ積み上げていく必要がある。どこかの段階でつまづいてしまっている場合は、その段階まで遡って学ぶ必要がある。できている箇所を見出し褒めて次の学びへの意欲を育てることはできても、できていない技術面を自分だけの力で修得することは不可能に近い。この場面では、今まで培った経験則をもとに最小限の指導

を加え、レポートを課された意図を踏まえた独り立ちへの方向性を導く指導を行った。

### ライティングセンターが果たすべき役割

レポート等の作成にあたっては、読んでもらう相手を意識し、わかってもらうための手順や工夫が必要である。特に、最初の段階で行うべきテーマの選択段階での手助けが、ライティングセンターでは有効ではないかと考える。

そもそも、自分なりに訴えたい何かを簡単に見つけることは、とても難しい。キーワードを元に思考を巡らすことは正攻法ではあるものの、自分にとって共感でき、面白く追及したいと思えるテーマを見つけることは簡単ではない。そんな時に、会話することでイメージが広がり、自分なりのヒントやきっかけが見えることに繋がることが多いのではないかと考える。事実、書けていないレポートの相談の中で、相談者の考えがある瞬間にまとまる場面があった。「えっ、ひょっとして、こんな考え方って、いいですね」との言葉に、笑顔の相談者の顔があった。

早い段階でのライティングセンターへの相談は、「ひとり一人の気づき」を促す最も重要な役割である。担当教員や学生チューターが相談者に寄り添い、一緒に内容を考えて、より良い文章を作る助言を行う。もちろん、書く前から完成後まで、どの段階でも相談に乗るのがライティングセンターである。とはいえ、早期の段階での利用促進の広報活動が、重要であろうと思われる。

(東田 充司)

## 3. 高垣 伸博 所員の場合

### 添削しない難しさ

筆者(高垣)はセンター発足以来、二ケタに届くかどうかの指導経験しかないが(2018年10月現在)、その数少ない経験を振り返ってみて、痛切に感じることは「添削をしない」「赤ペン先生にならない」という大原則を守るとことの難しさである。

相談内容がどんなものであれ、学生から文章を示されれば、目を通し、気になるところについて直しを入れてしまいそうになるのである。実際にそうしている自分にふと気づき、手を止め、学生に対して「ごめんね！ 添削はしないことになってるから、一緒に文章を見ていこうか。」と軌道修正することが度々あった。その時の学生のリアクションは「エッ！」である。

大抵の学生は添削してもらうことを期待しているのである。訂正してもらって早く仕上げ、締め切り間に間に合わせたいというのが本音であろう。つまり、レポートなどの提出物のしめきりに間に合わせるためにライティングセンターを頼りに来ることが目的なのだ。

そうではない！ 間違いに、おかしなところに自ら気づき、正しい日本語で文章を書けるようになることが、究極の目的である。そして、その手助けをするのが我々チューターの仕事なのだが、夢物語なのであろうか。

## 手ぶらは困りもの

前述のように、添削を求めてにしろ、何らかの「書き物」を持参してくれば指導のしようはあるのだが、手ぶらで来る学生の対応は大いに困る。

最初に訪問理由を尋ねるのだが、その説明が要領を得ない、説明ができない。あるいは、レポート課題の内容が理解できていないなど、指導しようにも前に進まないケースをいくつか経験した。

自分が受講している授業内容が理解できていない。当然、その授業でのレポート課題が理解できない。理解できず、説明できない学生は、当然なにも書くことができないから、藁をもすがる思いでセンターを訪れるのだが、どこまで手を差し伸べていいものか悩むところである。

こんなケースがあった。プロジェクト授業のレポート課題である。内容説明を聞いているうちに、勿論その説明は要領を得ないのであるが、グループリーダーへの文句やプロジェクトの進行に関する悩みを語りはじめ、仕方なく聞く羽目になった。もはや、ライティング指導どころではなく、お悩み相談室といったところである。しかし、けんもほろろに帰すわけにもいかず、どう収めようか難儀したのだ。

悩み相談のサービスも咨かではないが、最低限チェックできる書き物は持参してほしい。

## 気づきへの誘導と見えない終着点

数少ない指導の中でも、それなりの書き物を学生が準備して来訪し、それなりの指導をした経験も勿論ないわけではない。

添削はせず、辛抱強く気づきを促し、ただし、待ちくたびれて多少のヒントを出しつつも、学生に考えさせる。まさに根競べである。そんな場合は、到底予約の時間内では終わらない。双方に時間がある場合には時間を延長して、それでも時間切れになってしまう。締め切りまでに余裕がある場合には、翌週同じ時間帯に予約をしてもらい、書き直しを宿題にして終了する。そして翌週、書き直しを見るとまた一から出直さねばならない羽目になる。

指導中は気づきへの誘導をするので、それなりの文章に書き直せるのであるが、一人で書き直すと元の本阿弥。一朝一夕には身につかないということは重々承知なのだが。

つまり、我々所員がシフト時間内で学生にチュータリングするということは、その時の学生の課題を何とか完成させるだけで、学生自身の文章力アップにどれだけ貢献できているのか、ふと疑問を感じることもある。学生にとっては、あくまでも臨時の家庭教師と言ったところではなかろうか。

追大生の文章力底上げのために設立されたライティングセンターでチューターを務める者としては、書くことが苦手なボリュームゾーンに利用してもらい、リピーターになってもらうことを切に望むところである。締め切りに間に合わせるための来訪でも、勿論構わないのだが、課題でもなく、エントリーシートでもなく、締め切りの無い、純粋に自分の文章力を高めようと志す学生が訪れてくれるようになることを期待することは贅沢なことなのだろうか。

(高垣 伸博)

## 4. 泊 吉実 所員の場合

### なぜ書く力が必要か、まず理解してほしい

筆者（泊）は3年前まで新聞社に勤めていた。記者生活の節目の一つは、取材して記事を書く「記事の送り手」から、記者から送られてくる記事をチェックする「記事の受け手」に変わるときである。事件・事故や司法、行政などをテーマとして扱う社会部でデスク（次長）になるときがそうだった。ニュースの価値判断、取材指揮から記事の「てにをは」の直しまで行う。当時デスクは10人いた。業務を大まかに分ければ、朝夕刊の紙面づくりを順番に担う「当番業務」と、裁判や選挙などあらかじめ決められたテーマをフォローする「担当業務」である。

デスクは5年間務めた。当番業務と担当業務には、記者から出て来る原稿の処理に若干の違いがある。担当業務は記事が紙面になるまで比較的時間があることが多い。原稿を読んで気づいた点を説明し、後は、締め切りを示して自身で考え、仕上げて来るよう指示する。原稿の完成に向けて改善を促すという意味で、ファシリテータに近い。

一方、当番業務は飛び込んでくる記事をその日に紙面化しなければならない。記者に書き直してもらう余裕のないときもある。辻褄の合わないところは問い合わせで修正し、文章としておかしいところはこちらで書き換える。いわば添削、赤ペン先生に近い。

ファシリテータには根気と時間が要るのに対し、赤ペン先生は「書き手とのやり取りが少ない」分、手っ取り早い。では、記者教育にはどちらがいいのだろうか。ライティングセンターの指導方針である「ファシリテータ」に決まっていると言いたいところだが、「赤ペン先生」でも伸びる。どこをどういう風に直されたのかを見て学ぶ。うまくなりたいからである。確かな情報を分かりやすく伝えるのが新聞の使命であり、「書く力」がいかに必要か、記者たちには身に染みて分かっている。

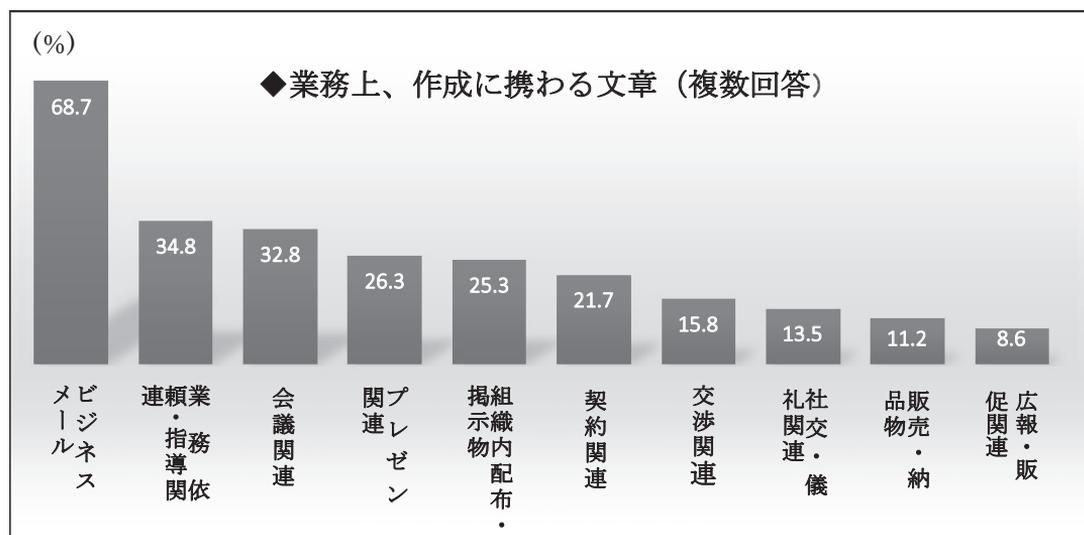
もちろん、記者と学生を同列に論じるつもりはない。ただ、文章を学ぶ必要性が分からなければ、成長は望めない。知っているのと知らないのとでは、取り組む姿勢が全く違って来る。

なぜ、書く力が要るのか、書く力を高めることで何を得られるのか。担当するゼミでは必ず説明する。あまり理解されていないと思えば、繰り返し伝える。それほどに重要だ。ライティングセンターの文章指導は1人40分と時間が限られているため、時間に余裕があれば、同様に話すようにしている。昨年（2017年）秋学期の定例セミナーでもテーマに選んだ。

### 書く時代に生きている

「ビジネスパーソンの“読む力・書く力”に関する調査2017」と題する調査資料が手元にある。大谷大学「文藝塾」が2017年3月、20歳から39歳の大学・短大卒のビジネスパーソン1000人を対象にインターネット調査した結果をまとめたものである。文藝塾は、作家やコピーライター、編集者など「書く仕事」を目指す学生に、高度な文章作成能力を身につけてもらうために開設された。

調査資料の中から二つの項目をピックアップし、それらのデータも交えて学生に伝えている内容を紹介したい。



(出典：ビジネスパーソンの“読む力・書く力”に関する調査2017)

一つは「書く時代」を生きている、ということである。業務上どんな文章を書くのかを聞いた調査資料の項目（複数回答）では、「ビジネスメール」（組織内外とのメール）が突出して多かった。自身の経験と照らし合わせ、こう推察できる。

組織内外とのやり取りは、かつては電話を使うか、出向いて顔を合わせて行われた。しかし、インターネットの普及によってそのかなりの部分がメールに置き換わった。やり取りの内容はもちろん、送受信の日時も記録に残るから「言った、言わない」のトラブルを避けることができる。添付ファイルを用意すれば、事の詳細も伝えられる。電話を架け直したり、出直したりする必要もない。相手は都合のいいときにメールに目を通してくれるだろう。

連絡手段としてこれほど便利なものはない。メールの登場によって、作成される業務用文章の総量はメールの相当部分が新しく積み増しされたと考える。メール以外にもツイッター、フェイスブック、ラインなどを使う場合もあるだろう。ビジネスパーソンが文章を書く機会はかつてないほど増えている。1本のメールが仕事の成否を左右する場合もあるだろう。文章の重要度も明らかに高まっている。今の時代を「書く時代」と呼ぶゆえんである。

### 「書くのが苦手」と言って済ますわけにはいかない

相手の顔を見て、声を聞いてやり取りする会話と違って、文章は読み手にいったん提示すれば取り返しがつかない。伝えたいことが明確か、表現は適切か。文章から書き手の能力が推し量られる。何より実務が円滑に進むかどうにかかわる。学生たちに伝えている二つ目は「書くのが苦手だと言って済ますわけにはいかない」ということである。書きっぱなしではいけない、相手に伝わるかどうか推敲する、一定レベルの書く力をつけるということである。書くことに無頓着では、ノーガードでリングに上がるようなものだ。逆に書く力を身につければ生涯の武器になる。特にこの点

を強調し、もう一つの調査項目に触れる。

「読む力・書く力」と「仕事の満足度」の関係である。まず、「読む力」「書く力」それぞれ5点満点で自己評価を聞いている。右表のように、両方とも4点以上の自己評価をした人を「得意」、両方とも3点と答えた人を「普通」、両方とも2点以下の自己評価をした人を「苦手」と分類している。「読む力」「書く力」それぞれの自己評価は個人の中でもバラつきがあり、「書く力」の方が「得意」が少なく、「苦手」が多い。

「仕事の満足度」も同様に5点満点で聞いている。読み書きが得意と答えた人と、読み書きが苦手と回答した人の仕事満足度との関係を示しているのが、右表である。違いは明らかだ。

仕事の満足度に影響を与える要素は、成果とそれに対する評価・待遇、人間関係だろう。報告、企画、提案など、書く力は仕事のあらゆる場面で求められる。事実関係と自分の考えを的確に表現できるかどうか。極端な話をすれば、いくら優れたアイデアを持っていても文字にして示されなければ、何もしていないのと同じである。「書く力がある＝仕事ができる」という関係にあることが、この調査項目から推察できる。

### 書くことは思考力、想像力を高める

一般的な学生に身につけてほしいのは、簡潔で明瞭な文章表現である。そのために鍛錬した結果として得られるのが、健全な言語感覚と文章作成のスキルである。しかし、それだけではない。鍛錬の過程で得られるものがある。思考力や想像力、判断力といった人間としての総合力のアップだ。これが学生に伝える三つ目である。

文章の根幹は言いたいことが明確であること。そのためには考えを整理し、組み立てる力が求められる。本当に相手（読み手）は理解してくれるのか。読み手の立場になって考える力も必要だ。さらに、文章を構築する際に情報や言葉を的確に取捨選択しなければならない。判断力である。

以上の3点を中心に、書く力が必要な理由をゼミやライティングセンターの文章指導で話している。手応えは感じているものの、十分ではない。

定例セミナーに集まった11人の学生が感想を書いた参加シートから2人分を紹介する。「自分に文章力がないと思って逃げていたこともあったけど、書くことの大切さ、重要さを知ることができました。来年（2018年）から社会人なので、頑張りたいと思いました」「書くことは読むことであり、考えることであるという話はとてもよく理解できました。書く力をつければ武器になるという

#### ◆「読む力・書く力」の自己評価

- ・読み書き得意（両方4点以上）：24.7%
- ・読み書き普通（両方3点）：32.2%
- ・読み書き苦手（両方2点以下）：12.7%

#### ◆「読む力・書く力」と仕事満足度

- ・読み書き得意（両方とも4点以上）  
仕事に満足（4点以上）：62.3%
- 仕事に不満（2点以下）：9.7%
- ・読み書き苦手（両方とも2点以下）  
仕事に満足（4点以上）：4.7%
- 仕事に不満（2点以下）：63.8%

※「ビジネスパーソン“読む力・書く力”に関する調査2017」から作成

言葉がとても印象に残りました」。どこまで真剣に受け止めてくれたのか、今も心にあるのか。知りたいところである。

### やっぱり待てない

ライティングセンターで文章指導をしたのは、まだ13人と少ない。扱った文章は授業のレポート、ゼミ志望理由書、エントリーシート、朝日新聞・天声人語の要約。書いた文章を事前に予約システムにアップしてくれる学生はほとんどいないため、指導の場で初めて目を通すことになる。

センターに足を運ぶ学生は比較的意識が高いからだろうか、論理構成や記述の具体性など不足している点はあるにしても、少なくとも落ち着いて読める。日本語の形ができているからだ。

多くの場合、一読した後に具体的な箇所を示して「良く書けている」と言う。プロの書き手であっても、最初の読者の反応はとても気になる。まして相手は、勇気を出して訪ねて来る学生たちである。まず、いいところをほめてあげたい。

次いで「自分の文章でスッキリしないところ、納得できないところはどこか、どんな点か」と聞く。続けてその理由を尋ねる。この2点をぼんやりとでも説明できればゴールは近い。やり取りしながら一緒に最善の方法を考えることができる。「どこがおかしいのか分からない」という場合は、「私の考え」と前置きして“答え”を言う。一人当たり40分の相談時間で、一から文章を読み、ファシリテータ役を全うするのは難しい。予約システムへの文章の事前アップを義務付けてもいいかもしれない。

### 要約は効果的だ

印象深いのは「天声人語」の要約である。3人ほど担当した。週3回要約しなさいという授業の課題はかなりハードだ。それぞれがきちんと書いてきたが、内容には差があった。大事なところを押さえているかどうかである。「どれを削ればいいのかなかなか分からない」と言う学生は、エピソードを多く残していた。話は面白いが、要約には不要だった。エピソードで筆者が言いたいことがあるはずだから、それこそが残すべき要素ではないかと説明した。天声人語のように「読ませる文章」は要約に向かないかもしれない。

的確に処理した学生もいた。直すべき箇所が見当たらなかった。「書くことが好きだ」と話してくれた。文章を読み込んで情報を取捨選択し、組み立て直す過程がイメージできた。

大野晋氏が著書『日本語練習帳』で「(新聞の社説の縮約は) 達意の文章が書けるようになりたいと思う人々には、たぶん役立つでしょう」と述べているように、要約は文章力を高めるのに効果的だ。文章の論理展開をたどりながら趣旨をつかみ、少ない字数で組み立て直す。一連の作業は、文章力の柱となる読解力や考えを組み立てる力、語彙力のアップにつながる。「日本語表現」などの授業でもっと取り入れていいかもしれない。素材はコラムより、幅広いテーマについて事実関係と主張をストレートに記述する社説が適切だろう。

センターを訪ねてくる学生は文章の重要性を理解しており、そう心配は要らないと思う。問題は、

「書くのは苦手」と決め込み、文章に注意を払わない学生たちである。担当する授業で日々接する文章の多くは大変だ。▽読点がない▽段落がない▽段落冒頭の一字下げがない▽主語と述語が対応していない▽接続詞や助詞の使い方が変▽「が」「が」で文が長くつながっている▽誤字脱字が目立つ▽言っていることが分からない——など様々な問題がある。

大学でのレポート、卒業論文の作成はもちろん、就職活動の成否にかかわるエントリーシートの作成、仕事の評価ややりがいにつながる報告書、企画書の作成に、学生たちはいやおうなく取り組むことになる。文章力の必要性を訴え、意識を変えてもらうしかない。そのための手立てを考えたい。

(泊 吉実)

## 5. 村上 亨 所員の場合

ライティングの指導経験は浅いが、そこから得られた指導上のポイントと文章作成上の注意点をいくつか紹介したい。

### 音読の効用

相談に来た学生には、まず原稿をそのまま読んでもらう。「そのまま」とは、段落と句読点から構成された学生自身の文章を読むということである。ところが、そのまま読む学生はほとんどいない。段落や読点があるにもかかわらず、とくに読点を無視して一気に読む場合が大半である。つまり、そこに読点を挿入した本人は、読点の意味を理解しないままに文章を作成したことになる。形式上、文章は文字と段落、句読点から成り立っている。その重要な構成要素である段落と句読点の意味を理解しない限り、読みやすい文章やわかりやすい文章を書くことは難しい。

音読は自然な文章を書くために不可欠である。読みやすいことはわかりやすいことにつながる。読者に理解しやすい文章は一定のリズムを有している。二つの別の話を息継ぎもせずに続けて話す人は少ない。次の話に移る前に一呼吸置く。そこに段落が生まれる。一つの文も、たとえば主語と述語が簡潔で短い文章であれば一気に話す場合もある。「リンゴが好きだ」。これを「リンゴが、好きだ。」と書くと、読み手の印象は違って来る。多少とも詩的な心象すら与えるだろう。読点を無視した音読は、書き手の意図を無視した読み方でもある。

次の段落に移る前には一呼吸入れる。読点を無視して一気に読まない。句点の後は少しの間を開ける。こうした約束事を守って読んだうえで、ぎこちない、不自然な間が空くといった場合が修正点になる。読んだ時の文章のリズムと書いた文章の句読点の間にずれがあることに気づけば、書き手自身で文章を磨くことができる。単なる添削では身につけることのできない文章力の向上に役立つのが音読ではないだろうか。

### 段落について

前節でも書いたように、段落や句読点の役割や意味を十分に理解しないまま文章を書いている場合が多い。とくに段落については、レポート用紙1枚、1200字程の中に段落が一切ない文章を多く

見受けるのが現実である。おそらくこれは、携帯電話のメールの影響ではないかと考えられる。友人同士に限らず、メールを書く場合に初めに一マス開けて文章を書くケースはまれである。メールのような短文であれば、読み手に理解されないケースは少ないかもしれない。しかし、400字あるいはそれ以上のレポートや論文を書く場合にはそうはいかないだろう。

段落のない文章の特徴は、一段落のなかに複数の話題が詰め込まれているところにある。まるで連想ゲームのように、思いつくまま話題が展開され收拾がつかない状態の文章が多い。結局、何が言いたいのかが不明の文章である。そうした文章は、書き手自身が何を伝えたいかを自覚していない場合が多い。その意味で、段落を意識することは、書き手自身の問題意識や考えを明確化することにつながる。段落という文章作成上の形式は、実は文章の内容を深めるための実質的な意味を有している。これが、段落を意識して書くことの効用ではないだろうか。

### 短文と句読点について

読みにくい文章や論点がはっきりしない文章の多くは、長文である。レポートなど、調べたことをすべて書こうとするあまり、接続詞を多用して文を長々とつなげてしまう。その挙句、主語と述語がかみ合わなくなってしまった文章も少なくない。こうした文章が読み手にとって理解しにくいことは言うまでもない。

わかりやすい文章、読み手に伝わる文章の基本は短文である。文章作成法を取り上げる書物の多くには必ずと言っていいほど書かれている基本的な方法である。ではどのようにして短文を書くか。短文を作成する方法にはいくつかの方法がある。第一は余分な言葉をできる限り省くことである。第二は複数の話題があれば、いくつかの文に分割する。第三は主語と述語を近づけることである。

相談学生には、この文章では何が言いたいのですかと問う。省いても言いたいことが伝わるなら、その言葉は省く。複数あるなら、それぞれの文に分割する。こうした作業だけでも、よりわかりやすい文章に変わるはずである。第三の主語と述語を近づけることは、以上の二つの方法でも可能であるが、より簡便な方法がある。それは読点に着目した方法である。

一つの文の中に読点を3つ以内にするという方法である。もちろん、これは原則である。多くの名称等を読点で区切って書かざるを得ない場合など、例外はある。しかし原則として3つ以内を意識することで、わかりやすい短文を書くことが可能になる。実際、ほとんどの新聞で読点が4つ以上もある文章を見ることはほとんどない。読点のない文か1つないし2つという文章がほとんどである。事実をわかりやすく伝えることを使命とする新聞の記事は、短文を書く場合の格好のテキストになる。

いまお読みいただいているこの文章が読みやすいか否かは読み手の判断にゆだねるほかないが、読点はすべての文が2つ以内である。いかがだろうか。学生に対する指導では、文章の基本である段落と句読点の重要性をしっかりと伝えることが重要であると再確認した次第である。

(村上 亨)

## 第三部 定例セミナーの報告

### 1. 文章には型がある～Discourse Markerを使った、書くトレーニング

筆者（梅村）は、2018年5月24日木曜日、「文章には型がある～Discourse Markerを使った、書くトレーニング」と題して、定例セミナーを行った。以下、そのセミナーの内容と狙いを書き留めておきたい。

#### 「よろず相談承ります」型ライティング支援の難しさ

ライティングセンターにはさまざまな文章が持ち込まれる。レポート、エッセー、ミニツツパー、小説、天声人語の要約、プレゼン原稿、チラシ原稿……。センターのパンフレットには「どんな文章でもOK!」と謳っているから拒むことはできない。しかし、熟達の所員でも臨機応変の対応はけっして簡単ではない。ましてや知識も経験も少ない学生チューターなら、なおさらのことである。勘所を押さえた的確なライティング支援には、「どんな相談にも乗ります」型ではいけないのではないかと考え始めている。

#### 「達意の文章」を書くための文章型の指導

筆者は、本学のライティングセンターが扱う文章を、今少し絞り込んだほうがいいのではないかと考えている。

基本的なことを確認しておきたい。文章は主として「情報伝達」と「自己表現」の二つの目的がある。もちろん多くの文章は両方の目的を含んでいるわけだが、「表現」より「伝達」に比重のある文章と、「伝達」より「表現」に比重のある文章があることは疑いようがない。伝達寄りの文章に求められるのは「的確さ」であり、表現寄りの文章に求められるのは「おもしろさ」であろう。

では、大学教員が学生に求める文章はどちらの文章かといえば、それはもう「伝達寄りの文章」にきまっている。小説や随筆のような、表現を味読し鑑賞するタイプの名文を大学教師は学生に期待しない。期待するのは「達意の文章」である。レポート、卒論、みなそうだ。

そして、このタイプの文章は既成の約束事にしたがって書き綴っていけば、誰でも破綻なく書けるものだ。たとえば、レポートなら、導入、方法、結果、考察、結論と書き進めれば無難だ。論文となれば、そこに問題提起や仮説設定や動機や社会的背景や先行研究のレビューが加わるだろう。これらは1つの文章の型のようなものであって、ひとたび身につければ、就職活動にも社会人になったときにも応用が利く、かなり汎用性の高いものである。

追手門の学生たちには、この達意の文章を書くための型（文章型）を身につけてもらいたい。レポートや論文を決められた枠組みに沿って書き上げて、チュータリングを受けに来るようになってもらいたい。そうすれば、ライティング支援は各段にやりやすくなる。文章型に沿って書かれた文章は読みやすいから、読み手の読解の負荷も少ない。学生チューターのストレスも軽減されるだろう。

## ディスコース・マーカーを先立たせて書く

文章型には様々なものが考えられるが、汎用性のある「伝達の文章」の文章型は、たとえば、表1のような機能を備えたものだろう。いわゆる「アカデミック・ライティング」以前の文章型のスタンダードである。すなわち、問題提起から始まって、結論を最初に述べ、その理由（原因・根拠・背景等）を3つに分けて述べる。そして、反論や一般論を紹介し、その妥当性を認めつつそれを乗り越える反立を述べる。必要に応じて、原点に立ち返ったり、例を示したり、未来を想起したりしながら、自らの結論の正当性や合理性を強調する。最後にもう一度結論を再提示して締めくくる。

| 機能                      | ディスコース・マーカー                                                          | 事実文<br>意見文 | アカデミック<br>ライティング |
|-------------------------|----------------------------------------------------------------------|------------|------------------|
| 問題提起                    | ～だろうか                                                                | —          | 学習者自身による問い       |
| 結論の提示                   | 結論からいうと～と考える。                                                        | 意見文        | 仮説の設定            |
| 理由（原因・根拠）の提示            | 理由は3つある。まず～。つぎに～。最後に～。                                               | 事実文        | 事実と意見            |
| 背景の提示                   | そう考える背景にあるのは……                                                       | 事実文        | 社会情勢への目配り        |
| 反対意見への目配りと<br>反対意見の乗り越え | 確かに～。しかし～……。なるほど～。だが……。～なのは確かだ。ところが……という見方がある。それに対して、……というのは事実だ。一方で、 | 事実文        | 先行研究のレビュー        |
| 一般論やステレオタイプな意見に対する反駁    | ～と考えられているが、実は……。とかく～だが、本当は……。                                        | 意見文        | 先行研究のレビュー        |
| 原点への立ち返り                | そもそも～。しかるに～。それゆえ～。                                                   | 事実文        | 上位概念             |
| 具体的な事例の提示               | 具体的に示すと～たとえば～                                                        | 事実文        | 例示               |
| 総括、要点の提示                | ようするに、つまり、簡潔に言えば、端的に言えば、煎じ詰めれば、結局のところ、                               | 意見文        | まとめ              |
| 未来の想起<br>必然性の提示         | このままできくと、その結果～                                                       | 意見文        | 反実仮想             |
| 結論の再提示                  | 最後にもう一度言うと……                                                         | 意見文        |                  |

<表1 ディスコース・マーカーの種類と機能>

大事な点は、こうした文章型を運用するための一つの“符牒”として、ディスコース・マーカーを先立って書かせるということである。

例えば、冒頭の「問題提起」なら、まず原稿用紙の升目を埋めるディスコース・マーカーは、「～だろうか」という発問形式の文末表現が代表的である。また、問題提起に続く「結論」を述べるときは、「結論からいうと～」と端的なディスコース・マーカーで言い切ってしまう。つぎに、「理由の提示」なら、「理由は3つあります」と指を立てて、「まず（一つ目に）～つぎに（二つ目に）～最後に（三つ目に）」と列挙のディスコース・マーカーを先立てる。

このように、ディスコースの冒頭に、機能を現すマーカーを置いてから書き始めるのである。

ディスコース・マーカーは、文章の読者へのきめ細かい配慮、思いやりであり、読み手が行わなければならない情報整理の負荷を、書き手が、読み手に代わって行う言語表現といってよいだろう。文章を書くとき、書き手は自分では内容がわかっている。しかし、読み手はそうではない。書き手にとっては歩きなれた道でも、読み手にとっては初めての道なのである。だから、道しるべを立ててやらなければならない。文章や談話における道しるべ、それが、ディスコース・マーカーである。ディスコース・マーカーは論理展開の前触れであり、文章や談話に一貫性をもたらす。

同時に、ディスコース・マーカーは、思考の道筋を照らす光、文章を書き綴るときの推進力でもある。たとえば、「結論は3つあります」と書き切った直後から、文章の書き手は、何とか3つの理由を捻出せざるをえない。「たしかに……」と書いたら最後、読み手の心に浮かんでいるだろう一般論やステレオタイプを想定して、それを乗り越えるアンチテーゼを考えざるを得ない。ディスコース・マーカーに背中を押されるように、ペンが前へ前へと進んでいくのである。ディスコース・マーカーに導かれて文章を書き進めていけば、原稿用紙が埋まらない、いつまでも空欄のまま、という悪夢から醒めることができる。

さらに、ディスコース・マーカーは、レポートや論文だけでなく、スピーチやプレゼンなどオーラル・コミュニケーションにも使えるという幅広い応用可能性をもつ。まさにWriting Across the Curriculumに役立つモデルである。

## 日本語の表現力検定の必要性

この文章型で書くトレーニングは、先にも述べたように、アカデミック・ライティング以前の基礎固めである。ディスコース・マーカーは、大学での論文やレポートの執筆だけでなく、会社での報告文やプレゼンテーション、会議における説得力のあるコメントにも有効なスキルである。文章型の習熟は、基盤教育の検定としてふさわしい汎用性を備えていると考える。

中には、こうした基礎的・定型的なライティング支援を、稚拙な方略と考える向きもあるかもしれない。たしかに、専門基礎教育や専門教育では、もっと発展的・探求的なライティング指導が求められるだろう。しかし、学部生を「ディシプリンを学ぶ初学者」と捉えれば、基本様式を型どおり教えるライティング支援の意義は認められなければならない。

文章型で書ける能力を検定にすることで、日本語の文章表現について「追手門のミニマルスタンダード」を示すことができる。そして、ライティングセンターに持ち込まれる多くの文章が、文章型を意識したものになれば、ライティング指導は格段に効率的になるだろう。学生チューターは「追手門のミニマルスタンダード」に習熟した、「一歩先を行く学部上回生」となる。文章型に習熟することは学生チューターのライティング支援の強力な武器になるだろう。

現在、基盤教育機構では、学びの基盤力を保証する「日本語表現力検定」の制度化を事業計画に掲げている。「よみ・かき・そろばん」の科目について、専門教育に進む前にクリアすべき合格最低基準を設けたい。その合否判定のツールが検定試験である。この「日本語表現力検定」の1つの

尺度に、「ディスコース・マーカーを使って一定以上の量の伝達の文章が書ける」ということを謳いたい。(梅村 修)

## 2. 際立つ文章を書くために

筆者(真銅)は、2018年5月31日木曜日12:45~13:15、「際立つ文章を書くために」と題してセミナーを行った。以下は、そのセミナーの原稿に加筆し、セミナーの場を再現する方向で書き換えたものである。

他の人より目立つ文章を書くにはどうすればよいのかを、日本の近代文学を主な材料としてお話します。

### なぜ川端康成と大江健三郎はノーベル文学賞を取ることができたのか ~周縁の話

これまで、日本人でノーベル文学賞を受賞したのは、川端康成と大江健三郎の二人だけです。昨年度受賞したカズオ・イシグロは、両親ともに日本人で、長崎県の出身ですが、国籍はイギリスです。また、村上春樹は、毎年のように候補として伝えられていますが、未だ受賞に至っておりません。

ところで、文学作品は多種多様です。スタイルも内容もバラバラで、統一的な基準など無いと思われれます。また、一作優れた作品があっても、同じスタイルや同じ内容を真似てもいい作品はできません。むしろ、前作と異なる作品の方が、「いい」作品となるのが通常です。

ではいったい、ノーベル文学賞は、どうやって選考されるのでしょうか。ノーベル文学賞の授賞理由は、すぐには明らかにされません。これはあくまで私見によるものですが、日本人受賞者の授賞理由を分析してみたいと思います。

中心と周縁という言葉があります。例えば、新聞の文章などは、一般的な大人を読者として想定して書かれています。その意味で、大人が中心的存在で、未就学児童などは、対象として想定されていません。このような場合、子供を、周縁的存在と考えます。同様に、男性中心社会という言葉がありますが、その場合は、男性が中心で、女性は周縁的存在ということになります。

その昔、ノーベル文学賞は、欧米の作家ばかりに与えられてきました。翻訳の問題や、文化の進歩のイメージなどが要因として考えられます。この際、欧米はノーベル文学賞に関して、中心的存在、一方で、日本を含む他の地域は、周縁的存在といえます。

また、健常者に対して、障がい者は、社会において、周縁的存在として扱われています。サラリーマンが中心的存在ならば、これまでは、フリーターは周縁的存在でした。

学生で言えば、4年で卒業する学生が中心ならば、留年する学生は、周縁的といえますね。

本題に戻ります。川端康成が1968年にノーベル文学賞を受賞した当時は、世界から見て、日本は非ヨーロッパ的という意味で、大変エキゾチックな国でした。これを恐らく意識して、川端は、受賞記念講演のタイトルを「美しい日本の私」としています。

中心がヨーロッパやアメリカ合衆国であったために、日本は周縁と考えられますが、この際には、

周縁であるがゆえに、これまでとは異なる世界観の作品であると捉えられ、敢えてノーベル文学賞が与えられたとも考えられるわけです。

一方、大江健三郎の場合はどうでしょうか。1994年に大江が受賞した際には、日本は既に欧米と並ぶ、いわば中心的な存在でした。日本の日本らしさを描くだけでは、もはや、周縁とは呼べない時代でした。しかし、ノーベル文学賞のためには、何らかの周縁的に目立つ理由が必要です。

ところで、大江健三郎は、生まれつき障がいを持つ自分の息子をモチーフとした作品を、多く発表してきました。先にも述べましたが、健全者が中心的存在であるならば、障がい者は周縁的存在ということができません。

敢えて、障がい者という周縁的存在に脚光を浴びせることで、世界の全体像を照射しようとする大江の方法論が、認められたものと考えられるわけです。

これが、この二人の受賞理由と、私が考えるものです。ここから導き出される我々へのヒントは、周縁から世界の全体像を描けば、他と違う視点を持つ、というものです。

例えば、小説の中の登場人物のうち、中年男の病死と、幼い子供の事故死とでは、どちらが衰しいと考えられるでしょうか。幼い子供の方ではないでしょうか。それは、幼い子供が、周縁的な存在であるからと捉えることができるわけです。

### 作家は料理人である ～文学化の話

例えば美味しい料理を食べた際、挨拶に現われたシェフにどのような言葉で褒めますか。「素材がいいので、誰が作っても美味しくなりますね」などとは言わないものですね。「同じ素材でも、料理の仕方でこれほど違うものになるのですね」とでも言えば、シェフは喜ぶはずです。

文学作品も同じです。例えば素材が同じ戦争であっても、出来上がる作品は、作家の腕次第で異なるはずです。戦争の悲惨さを描く小説群の中では、例えば小林信彦の「ぼくたちの好きな戦争」のように、戦争を素材に持ちながら、これをパロディーにして、面白おかしく描く小説の方が、印象が強い場合もあります。

素材をどのように料理したのかをアピールすれば、作者の工夫がわかってもらえ、高い評価を得ることもできるかもしれません。

例えば、「我が家に住みついた猫が、こちらを見て何かを語っているかのように見える」という素材があったとします。このとおりに書いてもよいのですが、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」という書き出しで始めるという方法もあります。どちらが目立つのか。ここがポイントです。

### 分かりやすくないと伝わらない ～図式化の話

せっかく周縁的で、工夫を加えた文章を書いても、それが読者に思うように伝わらなければ、効果がありません。そのために、小説家たちも、苦勞をしてきました。

「名詮自性」という言葉があります。登場人物の性格や役割を、名前で示すという方法です。例えば江戸時代の曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」に、八房という犬と暮らすことになる姫が登場しま

すが、この姫の名前は、「伏姫」です。人偏に犬という漢字で、既にその運命が出生時から示されていました。

この手法は、ややわかりやすすぎる嫌いもあるのですが、近代以降の小説にも用いられています。

尾崎紅葉の「金色夜叉」には、富山唯継という富山銀行の富の山を唯だ、継いだけの男が、ヒロインの宮さんの結婚相手として登場します。主人公の間貫一は、恋人宮さんの裏切りのあと、高利貸しとなって、金で報復しようとしています。つまり、金と女の間を一本貫こうとする男です。

そもそも作品のタイトルには、金と色（女のこと）によって夜叉になる、間貫一の像が込められているとも考えられます。

このような表現は、内容をより伝わりやすくするために用いられる方法です。これほどはっきりとはしなくとも、我々が目にする文章の多くに、いろいろな手法が用いられています。

金水敏という国語学者は、役割語という概念を提唱して、言葉を種類分けしています。詳しくは『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店）や『役割語研究の地平』（くろしお出版）などという著書に出っていますが、わかりやすいクイズの例を一つ、借りてみます。

次の言葉は、どのような人物が語っていると考えられるのかを、後の選択肢から選ぶ問題です。やってみてください。

- a. おお、そうじゃ、わしが知っておるんじゃ
- b. あら、そうよ、わたくしが知っておりますわ。
- c. うん、そうだよ、ぼくが知ってるよ
- d. んだ、んだ、おら知ってるだ。
- e. そやそや、わしが知ってまっせー
- f. うむ、さよう、せっしゃが存じております。

（選択肢） 1 関西人    2 老人    3 男の子    4 武士    5 田舎の人    6 お嬢様

どうでしょうか。簡単に解けたのではないのでしょうか。

しかし、すこしよく考えてみればわかるように、老人が全て、「そうじゃ、わしが」などと語っているわけではありません。これらは、その人物っぽく見せるために、やや大げさに表現された言葉なのです。

わかりやすく書くためには、時に、現実そのものからも離れる方が効果的なのです。アニメ「サザエさん」の「タラちゃん」の言葉などは、その代表的なものといえます。

「ぼくがやるです」「タマはご飯を食べたデスカ」「お帰りなさいデス」。

きっとみんな、おかしな話し方だと思っているはずですが、子供らしさだけは確実に伝わるので、許容しているのではないのでしょうか。

### ファンタジーはリアルに ～描写の話

現実世界を描く小説の文章は、まだましです。SFなどは、造られた世界を舞台とするので、よけ

いに、読者に伝える工夫が必要です。SFもまた、現実世界という中心的世界に住む我々に、未来や宇宙など、周縁的空間を創造することで、この世界の全体像を見せてくれるものといえます。

私が好きな小説に、P・K・ディックの「逆まわりの世界」というものがあります。内容は、1986年、時間が反転し、逆まわりし始めるというものです。墓場から死者が生き返り、食事は戻し、後ろ向きに進み、やがて、幼児となり、言葉が話せなくなり、子宮に帰っていく、という設定です。

典型的なSFで、一見すると、全編が荒唐無稽な物語ですが、よくよく考えてみれば、時間が逆まわりすることだけがSFの設定で、後は、実は極めてリアルに描かれていることに気づきます。

そういえば、「吾輩は猫である」も同様と考えられます。猫が語る設定だけが、虚構なのです。

大阪芸術大学で小説の書き方を非常勤講師として教えている頃、同大学の教授で、「ねらわれた学園」などで有名なSF作家の眉村卓先生に、小説の構想ノートを見せてもらったことがあります。とある未来都市を描く作品についてのものでしたが、立体交差の道路のどちらが上か下かというような設定まで、詳細に書かれていました。やはり、空想の小説であればあるほど、リアルな存在感が必要だということでした。

わかりやすさのためには、どうやら構想ノートの準備は必須のようです。

「源氏物語年立」というものがあります。五四帖各帖における人物の年齢などをすり合わせたもので、後世に作られたものですが、これに当たる構想一覧が、作品をよりわかりやすくするものと考えられるのです。

## 富士山の形を想像してみよう ～制度化の話

作者が作品を書き、読者がこれを読む際には、我々の知識や常識が、読者と共有されていることが必要です。最後に、我々の先入観について、考えてみます。

とりあえず、富士山の絵を描いてみてください。

これらが、これまで書かれてきた、有名な富士の絵です。(画像略)

そして、これが、実際の写真です。(画像略)

いかがでしょうか。

我々には、描く前から先入観と偏見があります。この先入観を打破しないかぎり、発見もありません。これは、文章についても同様です。表現が制度化していないか、点検してみましょう。対象をもう一度見つめ直した上で、書いてみましょう。きっと何かが変化するはずです。

太宰治の「富嶽百景」冒頭は、以下のようなものです。

富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらゐ、けれども、陸軍の実測図によつて東西及南北に断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいていの絵の富士は、鋭角である。いただきが、細く、高く、華奢である。北斎にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらゐ、エッフェル鉄塔のやうな富士をさへ描いてゐる。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと拡がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。

どうやら、太宰治は、このことに気づいていたらしいのです。読者に、富士の形に関する先入観を取っ払うよう、この文章は仕向けているとも考えられます。なぜ先入観を取っ払って欲しいのか。それは、太宰の小説を先入観なく読んで欲しいからでしょう。先入観なく読めば、これまでの文学とは違う、新しい文学がそこに立ち上がっていることに気づく読者も出てくるかも知れない。太宰はそこに期待したのでしょうか。

さあ、皆さん、読者をはっとさせる文章を書いてください。際立つ文章を書いてください。期待します。

(真銅 正宏)

### 3. 書けるようになる ～壁を破るコツ

筆者(豊島)は、2018年7月12日木曜日、「書けるようになる一壁を破るコツ」と題してセミナーを行った。

#### はじめに

表題のどのようにしたら書けるようになるかは、文章指導のシンポジウム、セミナーなどに何回通っても正解が得られない難問だった。「読書量が以前に比べて圧倒的に少なくなったからだ」と本を読ませる指導を進めている方も「読ませても書く力が付かない」と嘆いていた。「問う力を鍛える小論文指導」で論理的思考を根付かせることに腐心している方も「それでも書けないんですよ」とこぼした。

そういったときに出会ったのが「大人のための国語ゼミ」(野矢茂樹著、山川出版社)だった。「要約の練習をしよう。要約するとは、たんに文章を短くするというだけのことではない。文章の枝葉を切り取り、幹だけを残す。だから要約の練習をすることによって、言葉の重みに対する感覚が鍛えられ、メリハリのある読み方ができるようになる。より速く、より正確に内容が捉えられるようになる」としたうえで、「要約の練習は、国語力を鍛えるもっとも効果的な方法なのである」と結論付けていた。

この指摘には目が覚めた。私自身、新聞編集者として若いころにさんざん記事の削りをした。4年間の編集者生活を終えて、社会部記者として再び取材に出たとき、編集者になる前は頭の中でしっかりと記事構成を考えてから執筆していたのが、すらすらと、それも指定された行数に1行の狂いも無く書けるようになっていた。「要約」の猛練習の効果が出ていた。この要約指導を授業に反映させずにおくものかという使命感まで湧いた。春季セミナーで展開したのはその第一歩。国際日本学科の秋からの授業にも「削り方教室」と題して教材を提供した。まずはセミナーの内容を紹介したい。

#### 要約力を鍛えると書く力が付く

- 新聞社は新人記者を地方支局に配属する。
- 私は広島支局に4年間。それから編集、つまりは見出しを作ったり、記事に手を入れる整理部

に4年間、そして社会部に配属された。

- 社会部に出て、記事の書き方がまったく変わったことに気づいた。支局時代は記事の構成を考え、配置し、そして書き始めた。書くことでは4年間の空白があった。
- 心配していたのに、頭の中から糸を引っ張り出すようにスーッと書ける。30行の記事を注文されたら、30行ちょうどに記事を書けた。
- 整理部では毎日、ひたすら記事を削った。統合版といって、夕刊の無い地域向け紙面を作る担当が多かった。前日夜遅くにおきたニュースに夕刊のニュース、新しくおきたニュースを入れる必要がある。一升枧に二升も三升も入らない。朝刊、夕刊の記事を削らないと、新しい記事を入れられない。記事をひたすら削る毎日が私の文章力を向上させた。
- 要約することで何が鍛えられるか。言葉の重みに対する感覚が鍛えられる。どこを削りどこを残すか。「要するに」「一言で言えば」
- 要約は国語力を鍛える最上の方法だ

### タイトルづくりから練習

クロワッサンという女性向けの雑誌に料理の「100文字レシピ」が連載された。

著者の川津幸子さんによると「この料理は簡単でおいしいです」といくら言ったところで作ってみなければわからない。見ただけで「簡単」と分かる方法はと考えると100文字レシピにたどり着いたという。

最初は説明文と、レシピを手がかりにタイトルを考えよう。

### <レシピタイトル①>

#### ▽料理説明

つゆにとろみがついていると、熱い料理が平気な私も、さすがにゆっくり、ふうふういいながらいただきます。すると、おなかの底からぼかぼか。昔の人の知恵はすごいですね。夜食にもやさしい一品です。

#### ▽100文字レシピ

鍋にだし汁8カップ、砂糖大さじ2、塩小さじ2、しょうゆ大さじ4を煮立て、細切りの生ゆば1パック、斜め薄切りのわけぎ1わをさっと煮る。水大さじ3で溶いた片栗粉大さじ2でとろみをつけ、ゆでうどん4玉にかける。

[解答] ワケギとユバのあんかけうどん

### <レシピタイトル②>

今度は料理説明は省略。レシピの中のキーワードに注目してタイトルをひねり出して。

#### ▽レシピ

バター大さじ2で玉ねぎ1／2個の薄切りを7分炒め、小房に分けたカリフラワー1／2個も

炒めて水 2 1 / 2 カップ、固形スープの素 1 個を加え、10分煮る。ミキサーにかけ、牛乳 1 カップを加えて温め、塩小さじ 1 / 2、こしょうで調味。

〔解答〕 カリフラワースープ

#### <10文字要約①>

以下の文章を10文字に要約せよ

安倍政権が今国会で最重要と位置づける働き方改革関連法案が衆院を通過した。高度プロフェッショナル制度以外も論点が多い。(58字)

〔解答〕 働き方法案、衆院通過

#### <10文字要約②止>

以下の文章を10文字に要約せよ

象印マホービンが5月、創業100年を迎えた。魔法瓶で培った技術で保温機能付きの炊飯器製造にも進出。家庭を支えた。

〔解答〕 家庭支えて象印100年

もっといいのは

家庭ほかほか象印100年

#### これからも

このバージョンは一番やさしいもので、国際日本学科教材には段階を踏んで長い文章の要約に挑戦させることにして5回分のテキストを提供した。これからも教材作りを続け、文章力診断の基準に使ってもらえるようになればと願っている。

(豊島 真介)

#### 4. 日本語表現の眺望と新理解 — 「意味生成の相」とライティング指導 —

ライティング・センターにおける日常の指導は、一人一人の学生が何らかのテーマに沿って書いた具体的な文章につき、誤字・脱字、書式、文法、統辞、構成などの観点から問題点を指摘・解説して再執筆を促すことがほとんどである。一方、定例セミナーは対象も形式も小さなレクチャーの様相を呈するので、より一般的なことを語りやすい。そこで、目的を「明快な文章を書くために」と絞った上で、文章を書くという行為についての意識を変えるための話題を提供しつつ、作文の技術指導という日常の場ではなかなか踏みこめない、より方法化されたライティングの視点を示したいと願い、これまでに3回の小講義を行なった。

#### 第1回「明快な文章を書くために ～日本語表現の仕組みを眺めてみよう～」

日本語による文章表現には、住所表記から新聞記事や広告文まで、あるいは学術論文から記録文や契約・法律文まで、文体的に大きな広がりがある。大学のライティング・センターでは専らレ

ポートや論文を中心としたアカデミック・ライティングの指導が中心になるが、そういった学術的な文体が日本語表現全体の中でどのような特徴を持っているのか、ということをおぼろげに学生が見通しておくことは、実り多い指導の前提になるのではないか。

そのような発想から、南浦文之「鉄炮記」にある火縄銃の描写、塚本邦雄『国語精粹記』に記された京都の住所表記、「御前菓子秘伝抄」に見る葛餅の製法、宇井伯壽『インド哲学から仏教へ』中の小乗仏教と大乘仏教に関する相違説明、仲畑貴志によるTOTO ウォッシュレットの広告、荻生徂徠『論語徴』の一文などについて、「意味生成の相」という観点をを用いて多様な文体を統一的な原理で解説し、それらの特徴を示した。

その上で、「論理の相」「了解の相」「日常経験の相」といった複数の「意味生成の相」を意識的に想定することによって文章における意味生成を制御することができ、文体の書き分けが可能になることを示唆した。

## 第2回「明快な文章を書くために～“思考の三角形”を活用しよう～」

三段論法にせよ弁証法にせよ、人間は“三角形”を描くように思考を展開することが多い。文章を書く際も、ある前提を立てた時に自ずと立ち昇るおぼろげな結論の影を追いながら、その二つを結びつける証拠や理由を次々に思い浮かべて適切なものを吟味するという、いわば“思考の三角形”を閉じる過程そのものが、考えをまとめ一文をつくることとほとんど不可分である場合がしばしばである。

文章を書くことを、このようにまず小さな“思考の三角形”をつくること、そしてそれを繋ぎながらより大きな“三角形”をつくってゆくこと、と捉えれば、レポートの課題を前に途方に暮れている学生に対し、一縷の光明を与えることができるかもしれない。

そのような発想から、久野収「安全の論理と平和の論理」、家永三郎『戦争責任』、田川建三『書物としての新約聖書』からそれぞれ600字程度の文章を抽出し、その中に“思考の三角形”があることを示し、それらが二重三重に重なり合って大きな“三角形”をつくっている様子を明らかにした。

さらに、“読む”ことを“思考の三角形”を見つける行為と捉え、そのための方途を指摘すると同時に、“書く”ことを“思考の三角形”をつくり組み合わせる行為であるとし、その具体的な方法を開示した。

## 第3回「明快な文章を書くために～“文章の2次元と3次元”を考えてみよう～」

田河水泡の漫画『のらくろ軍曹』のコマ割りは1ページを横に四等分するのが基本型であり、ひとコマの画角も、ちょうど芝居の舞台を見るように、上手から現れた役者に下手から現れた主人公が出会い、中央で会話を交わして左右に分かれてゆくというパターンを脱していない。しかし、これが手塚治虫の『鉄腕アトム』になると、あたかも映画を観るように視点の角度は目まぐるしく変わり、クローズアップとロングショットが交錯し、コマ割りも大小自在となる。さらに、最近の大

童澄瞳『映像研には手を出すな』では、台詞を囲んだフキダシまでが画角の遠近法に合わせて変形され、より漫画空間への没入感が強調されている。

漫画表現におけるこのような空間把握の違い、そこからもたらされるリアリティの相違を実感することにより、それを支えとして、ライティングにおいても道案内もしくは取扱説明書のような“線形=2次元”的な文章の書き方から、情報を多面的に組み合わせる“立体=3次元”的な書きぶりへと、学生のライティング意識を飛翔させられないだろうか。

そのような発想から、上記の素材を提示して漫画表現における“2次元と3次元”を体感させた上で、ウェブサイトのcookpad.com「半熟卵」および諏訪勝『破壊-ニッポンODA四十年のツメ跡-』から抽出した150字ほどの文章を比較することで、文章表現における“2次元と3次元”の感覚的な理解を促した。

その上で、文体の違いによって異なる印象が生ずる由来を「意味生成の相」の考え方により解説して、“3次元”的ライティングの試行を促した。

これまでの定例セミナーでおこなった小講義を貫くのは「意味生成の相」という考え方である。未だに明らかな先行研究に出会わないので、探求は手さぐりにならざるを得ない。しかし、各種の文体の違いや特徴を直感的かつ統一的に説明できる利便性において、ライティング指導にも将来いくばくかの寄与をなしうるのではないかと考える。今後も考究を続けつつ、定例セミナーで取り上げる別のテーマにも応用してゆきたい。

※上記レクチャーは本学ライティングセンターWebsiteで動画により公開されている。

(<https://otemon.ac.jp/facilities/education/writingcenter.html>)

※「意味生成の相」に関する詳細については、拙稿「文体解剖の試みと困難—『行間設計』の解明をめざして—」(雑誌『Signo』通巻6号所収、研究会シグノ、2002年)を参照

(齊藤 一誠)

## 5. 翻訳で鍛える ～文章の解体、言葉の再構築

筆者(佐藤)は2018年6月14日、ライティングセンターの定例セミナーにおいて「翻訳で日本語を鍛える～文章の解体、言葉の再構築」と題する講義を行った。自国語を学ぶためには外国語の学習が有効な方法であり、外国語の翻訳に苦闘することによってむしろ自国語が鍛えられるという経験を、本学の学生に平易に伝えることができないかという思いから、このテーマを選んだ。

私事になるが、筆者は30年間にわたって時事通信社に記者として勤務し、そのほとんどを外国駐在記者および国内での外信部記者・デスクとして過ごした。外信部とは、海外のニュースを日本国内に配信する部局であり、時事通信特約のフランス通信(AFP)やロイター通信などの英文外電を日本語の記事に翻訳することも重要な任務のひとつになっていた。筆者はこの時代に翻訳技術を学んだが、翻訳に取り組むことは、意味内容伝達という制約下において、日本語の語彙や表現の選択

を意識的に促す利点がある。

一定の制約・制限のある不自由なところで言葉を選び抜く作業こそが、文章上達の秘訣なのであり、翻訳はそのための格好の思考の場となることを筆者は伝えようと考えた。

### ことわざの事例

そのために筆者は、英語のことわざを日本語に置き換える事例を解説した。

Nothing ventured, nothing gained.

これは、「危険を冒さなければ何も得られない」という意味であり、こう訳しても何ら間違いではない。しかし、もっとこなれた日本語を目指すという立場からすれば、この訳では物足りない。ここで、翻訳者は英語→日本語という置き換えから、日本語→日本語への置き換えに意識が移行せざるを得ない。だが、本来の英語の意味内容から逸脱してはならず、その制約の下で、思考を若干飛躍させる必要が出てくる。

結論から言えば、「虎穴にいらずんば虎子を得ず」という中国由来の我が国のことわざに逢着すれば、正解ということになるわけだが、原文から離れながらもその意味からは離れず、同義の日本語のことわざを探し出すことを意識的に体験するプロセスだと言えよう。

同様に、「同じ羽の鳥は群れを成す」という意味のことわざ **Birds of a feather flock together** についても、学生たちは英語の意味内容を把握し、その日本語を叩き台にして、より優れた訳文を探す作業を体験した。ことわざの中の **birds** はムジナとなり、**feather** (羽) は消え、「同じ穴」に転換される。「類は友を呼ぶ」の訳文にたどりつけば、そこにはもはや鳥も羽もない。この転換の作業では、英語の意味内容の根底に降り、そこから日本語として最もふさわしい訳文を手にするための思考のはしごをよじ登るといふプロセスをたどることになる。

セミナーで筆者は、翻訳では「『適度な』飛躍は美しい」という法則を提示した。

鳥がムジナになるのは飛躍であるが、しかし、伝達すべき意味内容から逸脱してはならないという制約上、飛躍には「適度な」という前提条件がつくことになる。

### ニュース英語の翻訳に挑戦

ことわざの訳文を紹介した後で、セミナーでは英文ニュースの翻訳のバリエーションを検討した。教材として使用したのは、セミナー直前に開催されていた先進国首脳会議（サミット、G7）に関する以下のようなニューヨークタイムズ紙記事のリード文だった。

### Trump Refuses to Sign G-7 Statement and Calls Trudeau 'Weak'

President Trump upended two days of global economic diplomacy late Saturday, refusing to sign a joint statement with America's allies, threatening to escalate his trade war on the country's neighbors and deriding Canada's prime minister as "very dishonest and weak."

(The New York Times June 9 2018)

筆者は、掲載される媒体によって、この記事の翻訳文の言葉遣いや雰囲気を変えなければならぬことを説明した。その意識の下で、日本語の語彙や表現の選び方が変わってくるのであり、ここに「英語との格闘」というよりも、「日本語との闘い」が起きることを学生たちに伝えたかったのである。

まず、この英文記事の意味を押さえる必要がある。基盤的な訳文は以下のようになるであろう。

#### ◎トランプ米大統領、サミット声明への署名を拒否

=トルドー・カナダ首相を「弱い指導者」と呼ぶ=

トランプ米大統領は9日夜、2日間にわたるグローバルな経済外交の成果を根底から覆した。トランプ氏は米国の同盟国との共同声明への署名を拒否し、隣国との貿易戦争をエスカレートさせると脅し、カナダの首相を「非常に不誠実で弱い性格だ」とあざ笑った。

筆者はこの訳文を「一般紙」に掲載される仕様に修正しようと試みた。その場合、記事1行目の「根底から覆した」や「脅し」「あざ笑った」はいわゆるストレートニュースには適切ではないと考え、次のような体裁に変換してみた。原文は「根底から覆した」だが、これを受動態で訳出することによって、客観性が整えられる効果が生じる。

カナダで開催された主要国首脳会議（サミット）で、トランプ米大統領は9日夜、共同声明への署名を拒否、2日間のグローバル経済をめぐる討議の結果は根底から覆された。トランプ大統領はさらに、隣国との貿易戦争をエスカレートさせると警告するとともに、議長国カナダの首相を「非常に不誠実で弱い性格」と批判した。

筆者はさらに、この記事がタブロイド紙に掲載されるとすれば、どのような文体がふさわしいかを検討した。タブロイド紙とは、一般紙の半分位の大きさの紙面で、芸能界・著名人のゴシップや社会の事件をセンセーショナルに報じる新聞であり、大衆紙とも言うことを学生たちに説明した。

そこで筆者は、「根底から覆した」を「ちゃぶ台返し」に置き換え、この表現を軸に記事全体をゴシップ調に色付けしてみたらどうなるかを示した。「警告」も「脅迫」に変え、「水泡に帰した」といった大仰な表現も加えた。「あざ笑った」「批判した」と訳した部分も「罵倒した」にし、「非常に不誠実で弱い性格」を「度し難いペテン師」「腰抜け」に飛躍させた。（佐藤 伸行）

## 謝 辞

本稿の掲出に当たっては、基盤教育論集の誌面を拝借した。

発足間もなく、いまだニューズレターも紀要も整備されていないライティングセンターにとって、このように発表の場を提供いただけたのは幸いだった。謹んで、基盤教育機構紀要編集委員会に感謝する次第である。

ライティングセンターの第一の使命は、「学習支援」であり、学生のライティング能力の向上に資することである。しかし、それだけではない。規程第3条には、「ライティング能力向上に関する教育の調査・研究に関すること」と明記されている。調査・研究の成果還元を今後も継続していきたい。そして、将来的には、所員の手になる論考を発表する「紀要」の発行を目指したいと考えている。

(梅村 修)

## 参考文献

### 【梅村 修 執筆分】

外山敦子 (2018) 「学生の文章作成における「つまずき」の傾向：ライティングサポートデスク相談記録の分析を通して」愛知淑徳大学初年次教育研究年報3 P5-8

永井聖剛、櫛井亜衣他 (2006) 「「対話」を重視する「全学的ライティング支援」の実践的研究」成果報告 愛知淑徳大学論集 メディアプロデュース学部編6 P1-26

増地ひとみ (2018) 「ライティングサポートデスクにおけるチューター研修の実践報告：他者との対話と共有による意識の変化に着目して」愛知淑徳大学初年次教育研究年報3 P14-17

増地ひとみ (2018) 「日本語ライティング支援に携わる学部生チューター研修の実践報告」(リメディアル教育におけるライティング支援施設のあり方を考える) 日本リメディアル教育学会第14回全国大会発表予稿集 P84-85

### 【東田 充司 執筆分】

坂本麻裕子・中島宏治・宇都伸之・渡寛法・嶋田大海・佐渡島紗織 (2018) 「ライティング授業で課題文章に付与されたコメントに対する学生の反応－実験とインタビューによる調査－」『リメディアル教育研究』日本リメディアル教育学会12 P39-48

### 【泊 吉実 執筆分】

大谷大学文藝塾「ビジネスパーソンの“読む力・書く力”に関する調査2017」

大野晋『日本語練習帳』(岩波新書、1999年)

阿部紘久『文章力の基本』(日本実業出版社、2009年)

出口汪『「最強！」の書く技術』(水王舎、2015年)

池上彰、竹内政明『書く力』(朝日新書、2017年)

野口悠紀雄『「超」文章法』(中公新書、2017年)

**【齊藤 一誠 執筆分】**

南浦文之「鉄炮記」(『日本史史料(2) 中世』所収、岩波書店、1998年)

塚本邦雄『国語精粹記』(河出書房新社、1990年)

「御前菓子秘伝抄」(『近世菓子製法書集成1』所収、平凡社、東洋文庫、2003年)

宇井伯壽『インド哲学から仏教へ』(岩波書店、1978年)

仲畑貴志 TOTO ウォッシュレットの広告(「朝日新聞」掲載、1980年)

荻生徂徠『論語徴』(平凡社、東洋文庫、1994年)

久野収「安全の論理と平和の論理」(『憲法読本 - 下 -』所収、岩波新書、1965年)

家永三郎『戦争責任』(岩波書店、1985年)

田川建三『書物としての新約聖書』(新教出版社、1997年)

田河水泡『のらくろ軍曹』(講談社、1969年)

手塚治虫『鉄腕アトム』(講談社、1979年)

大童澄瞳『映像研には手を出すな』(小学館、2018年)

cookpad.com「半熟卵」(<https://cookpad.com/>)

諏訪勝『破壊-ニッポンODA四十年のツメ跡-』(青木書店、1996年)

齊藤一誠「文体解剖の試みと困難—『行間設計』の解明をめざして—」(雑誌『Signo』通巻6号  
所収、研究会シグノ、2002年)